やまぶきの花

今給黎靖子

1

マリアは前日、事務室で教えられた通り、真っすぐ二階のB1教室へ向かった。階段を上がって、一番奥にその教室はあった。廊下の奥の窓から満開の桜が見え、日本はどこもかしこも桜満開、本当にきれいだなと思った。

入り口のドアが開いていて、ふと見ると、七、八人の学生が席に着いていて、本を読んだり、勉強していたり、女子学生が二人、小声でおしゃべりしている。

窓際の席がいいかな？ などと思いながら中へ入って行った。左隣に男子学生が座っている窓際の席が空いていた。ここに決めようと思ってバッグを置くと、隣の学生が顔を上げて、「こんにちは」と言った。マリアも「こんにちは」と返し、「ここ空いていますよね」と念を押すように言うと、男子学生はマリアの方を見ながら、「空いています。どうぞ」と言って椅子を引いてくれた。

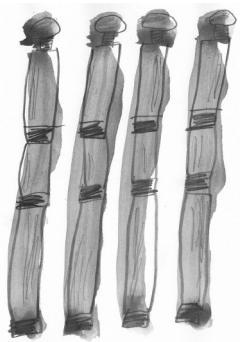
「今日、初めてでしょう。韓国からですか」と言う。

「いいえ、韓国からじゃありません。南米ペルーからです。ペルー知っていますか？ 私はペルーのリマから来ました」

男子学生は怪訝な顔をして、「ペルー？」。

「私は日系ペルー人。両親は日本人で、一九六四年にペルーに移住したんです」

「日本語できるじゃないですか。ちゃんと話しているじゃないですか？ なんでわざわざ日本語学校に」



「両親が日本人ですから、一応話すことはできますけど、漢字はさっぱり分かりませんし、文法もだめで書くということになると、書けないんです。勉強して書いたり読んだりができるようになりたいし、大学も日本の大学に行きたいと思って。それで、あなた、お国はどちらですか」

「僕は中国からです。武漢って知ってますか？　上海からずっと奥地に入ったところにある大きな街で、長江の中流になるんです」

「武漢、聞いたことはあります。リマにも中国人、結構いますね。レストランとか按摩とか商売してる人、結構いますよ。あなたなぜ、日本語勉強してるんですか？」

「日本の大学に行きたいと思っているんです。中国には大学、少ししかなくて行けないんです。国立だけで、一〇％くらいの人しか行けないです。僕、劉偉（りゅう）と言います。よろしく」

話している内に、始業のチャイムが鳴った。マリアは彼の白い肌が気になった。白人の白さとは違うきめ細かい透明な肌、東アジア特有の白さ、それがとても美しいと思った。

教室の中の学生は十八人。半分が中国人、韓国が三人、ネパールが二人、後はアメリカ、イギリス、マレーシア、ロシア、それぞれ一人ずつ。教室の公用語は日本語だそうで、みんな会話は日本語。先生がおもしろいことを言って笑わせたり、学生もそれに対してジョークを言ったりして、楽しい授業だった。

漢字の授業になると、俄然中国人が強くなる。日本と中国では同じ漢字でも全く意味が違ったりする。「手紙」は同じ字を書いて中国ではトイレットペーパーのこと、などと中国人が言うとみんなが笑う。そこへロシア人のアレックスが「黙れ、中国語の時間じゃない」と厳しく糾弾した。一瞬教室の中が静まり返る。マリアは、ロシア人って中国人に対抗意識が強いのだろうか、それとも言いたいこと遠慮せずはっきり言う民族なのかな。リマではロシア人は見なかったような気がした。

先生は漢字の授業を淡々と進めていかれた。漢字の成り立ちや意味を一字一字きちんと教えてくださる。習わない前はマリアにとって漢字はぐじゃぐじゃしているだけで、なんのことかさっぱり分からなかった。きちんと教えてもらうと、なるほどと納得できて、なかなかおもしろい。漢字って意味があってほんとにおもしろいものだと、興味が湧いてきた。

日本語の授業は、漢字、文法の他に作文、読解、聴解などとなっている。みんなは聴解が一番難しいといっているが、マリアにとっては一番易しくて、ほとんど満点に近い

点数が取れる。B1クラスは日本語二年目の人が殆どで会話はスムーズだった。

授業は午前と午後に分かれていて二部式になっている。学生たちのアルバイトに合わせてのことだ。Bクラスは午後一時の始業で五時に終わる。一コマ九十分、二コマ組まれている。学生は殆どバイトをしているので、自分の都合に合わせて、午前、午後の授業を選んでいた。

マリアもそのうちにバイトしようとは思っている。両親からの仕送りはあったが、朝早いパン屋さんで働いてみたいと思って、学校にも家にも近い店を探していた。

始業の三十分前に教室に入ると、彼も昨日の席と同じ席に座っていた。

「早いんですね。席決まっているんですか」と尋ねると、

「いいえ、自由ですよ、みんな大体同じところに座っていますね。時々変わっている人もいますけど、人間って同じところが好きなんでしょう。僕はいつもこの席。少し遅くなっても誰も座っていませんので」

「バイト、なにかしてるんですか」

「してますよ。家賃も払うし、学費だって自分で払わなきゃならないし、食べることも。厳しいんです。来年大学へ行く費用だって貯めなくてはならないし、そのほかあれもこれもですよ。誰も助けてくれませんから。少しでも収入の高いところじゃないとね。居酒屋で働いています。就学生はバイト四時間って決まっているんですけど、それじゃやっていけませんからね。六時から十二時までということで働いています。しかし片付けなんかして、ほんとうは二時まで、八時間働いているんです。夜のバイト料は高くなるんです。食事も出してくれるし、余った食べ物は好きなだけ持たせてくれますから、食事代は殆ど要らなくて、助かりますね」

話を聞いてマリアは驚いた。なにもかも一人でしてるんだ。偉いなと思う。仕送りしてもらっている自分が恥ずかしい。早くバイト先を探さなくては。

「それで大学はどこを志望してるんですか」

「デザインの勉強したいと思っているんです。中国にはそういう関係の学校って、殆ど無いんです。九産大に芸術学部が在るんです。福岡に来た理由は、母の知り合いが福岡にいて、保証人になってくれるということで、来ることができたんです。保証人がないと日本へは来れませんから。母は子供の頃、満州の方ですけど瀋陽というところにいて、保証人の木下さんの家族ととても仲良くしていたそうで、僕が日本へ行きたいと言ったら、すぐ応じてくださって家もアルバイト先も見つけてくださって、とても助かりました。運が良かったんです。母は日本語も少しできて、日本

に来る前、少しだけ教えてもらったんです。保証人さんはとてもよくしてくれてありがたいですよ。あなたはどうして福岡へ来たんですか」

「父が福岡出身なんですよ。福岡といっても市内じゃなくて飯塚っていうところなんです。母は沖縄出身です。結婚してすぐにリマへ移住したと言っていました。本当はアメリカに移住したかったそうですけど、母はアメリカ統治下の沖縄でしたから、すぐにでも許可は下りたそうですけど父は許可が下りない。その頃、日本人はアメリカ移住はできなかったそうで、リマに行ったんだと話していました。

両親は日本の中古車を販売するビジネスをしてるんです。私はそれをしようとは思っていませんけど、何かビジネスしたいとは思っているんです。福岡大学の商学部を受験するつもりです。一年しかないから頑張らなくちゃ。私の名前、中山マリアといいます」

授業が終わったら少しくらい劉さんとおしゃべりしたいなと思うのだが、六時からバイトだということで自転車に飛び乗り、大急ぎで帰ってしまう。授業前の二、三十分だけが唯一、彼とのコミュニケーションの取れる時間だった。それでもマリアは嬉しくて日本語学校へ行くのが楽しくてたまらないのだった。昨年五月の終わり、リマの高校を卒業した後、リマの大学へは行きたくなくて何をしようかとあれこれ迷っていた。今年になってから、日本へ行くことを決めた。日本へ行って勉強しよう。なぜ日本で勉強したくなったのか自分では分からない。日本は科学技術も進んだ立派な国と、リマの人々が言っているからかも知れない。幸い両親も二つ返事でＯＫしてくれた。

五月始め学校の遠足で、海ノ中道海浜公園へ。学生たちは子供のようにはしゃいでいた。勉強と仕事、忙しい日常から解放されて、身も心も自由に。入り口で入場券を受け取り、それぞれ公園の中へ。三時に出口に集合。約束はそれだけ、後は全て自由だった。

劉さんと二人乗りの自転車を借りることにした。真っすぐレンタル自転車場へ。日本語学校の学生たちが既に何人も並んでいて、しばらく待たねばならなかったが、赤色の新しい二人乗り自転車を借りることができた。劉さんが前に、マリアは後ろに乗った。

劉さんがびゅんびゅんこいで行く。マリアも負けずにびゅんびゅんこぐ。「海のところへ出たら、自転車止めてちょっと下りるよ」と、それまでと違った親しみのある言葉で言った。

海ノ中道海浜公園はその名の通り、左側も右側も海。地

面は砂だけでできている。見渡す限り松の林。足元には沢山の花が植えられている。「きれいですね」とマリアが言うと、「何度か来たことあるよ。いいとこでしょう」と先輩面して言った。

ビーチが三日月のようになって、どこまでも続いている。自転車を止めて、乾いた砂の上に腰を下ろし、両手を広げて、「わあー」と大声で叫んだ。なんていい気持ち、「世界は私のものー」とマリアはもう一度大声で叫んだ。劉さんも笑った。

「夏休みに入る前、学校はバスを出して阿蘇、九重、別府などへ旅行を計画してるし、秋には近くだけど遠足で立花山に登るね。昨年の夏、阿蘇や別府に行ったけど驚いたよ。地の底から温泉がどんどん湧き出していて、生まれて初めてのことでほんとに驚いたね。温泉にも初めて入って、やけどするんじゃないかって心配したけど、入ってみたらとっても気持ち良くて、これは病み付きになりそうって思ったね。

中国にいる頃、日本は小さい国って思っていたけど、景色もいろいろ変わるし、どこへ行っても美しい。いろんな不思議なものもあって、素晴らしい。僕、旅行が大好きなんです。去年の夏休み、北海道にも行って来ました。北海道もまたきれいでしたね。感動しました」

「私も北海道に行ったことあるんです。一九八〇年のことでしたから九歳の時です。家族で日本に旅行したんです」

「じゃ、あなたは今年十九歳、若いね。僕は六六年生まれ、五歳上だ」

「二十四歳、立派な大人ですね。去年二十三歳の時、日本に来たんですね。向こうでは働いていたんですか」

「ええ、働いていました。公務員だった。仕事はあんまりおもしろくなくて」

「私、十日ほど前から家の近くのパン屋さんでバイトしてるんです。それでサンドイッチと菓子パン、お弁当に持って来ています。食べませんか」

「それは助かります。売店でおにぎりでも買おうかなって思っていたところです。おにぎりっていいものですね。日本に来て初めて知りました。これは美味しくて便利のいいものですね。中国人はお弁当というもの知らないんですよ。どこに行っても熱いもの食べるんです。家に食べに帰りますね。家が遠い時は食堂みたいなとこ探して食べに行くんです」

マリアはポットから熱いコーヒーを出して、サンドイッチや菓子パンと一緒に小さなシートの上に並べた。大きな海を前にして、ほお張るサンドイッチはこの上もなく美味しい御馳走に思えた。

「日本は住んでいる近くに美しい海がある。武漢は内陸だから海、見たことなかったですね。湖はあるんですけど、汚いんですよ。ここの海のようにきれいじゃない」

遠足の後、親しさがまして、いろんなことが話し合えるようになっていた。日曜日には大濠公園や西公園、百道浜などきれいなところへ、どちらからともなく誘って自転車でサイクリングした。

ある時、いい映画があるからと誘ってくれた。それは『さらば、わが愛 覇王別姫』という中国映画で、文革の頃の京劇の役者の生涯を描いたものだった。見終わってマリアは言葉が出ないくらい強い衝撃を受け、中国という国の恐ろしさを思い知らされた。中国人はこんな理不尽なことに対して何も言わずに従ったのか、おかしいとは思わなかったのか、理解できなかった。

劉さんは三、四歳の頃、両親が遠い農村へ下放され、祖父母の家に、六歳上の姉と二人預けられたという。姉ちゃんに抱かれて毎晩、母さん母さんと泣いていた、と話してくれた。

夏休みが近づいた七月のある日、マリアが言った。

「私、沖縄に行こうと思ってる。那覇におばあちゃんが一人で暮らしてるから」

「いいな、僕も行きたい。ずっと前から沖縄には是非行きたいと思っていました。東京、大阪そして北海道には去年行ったけど、沖縄にはまだ行ってない。今年辺り行きたいなと思っていたんです」

「そしたら一緒に来ませんか。おばあちゃんの家、広いし、ゆっくりできますよ」

「バイトがあるから長くはいれないけど、土日を入れて三日か四日くらいなら休みも取れます」

「じゃ、一緒に行きましょう。嬉しい。沖縄の海ってすごくきれい。世界中で一番きれいかもしれない」とマリアが言うと、

「思ってもみなかった幸運だ。楽しみができたから頑張って働くよー」

2

夏休みとあって、機内は学生や子供連れの若い家族で満席だった。

「おばあちゃんが空港まで迎えに来るって言ったけど、寄り道するから来ないでいい、と言ってます。沖縄は海しか見るところないんだけど、琉球王国時代のお城があるん

です。首里城といって王様が住んでいたんですよ。戦争で焼けてしまったけど、今再建中なんだそうで、城は見られないんだけど、中国から送られた〈守礼門〉が昔のまま残っているので、そこへ案内したいと思ってます。琉球王国は小さな国でしたから、十五世紀頃から中国に朝貢貿易していたし、勿論日本とも仲良くしていたんです。日本は鎖国していたけど行ったり来たりはしていて、東南アジアとも貿易して、貿易国だったんです。沖縄で一番賑やかなところは国際通り、もし興味があったら行きましょうか」

「国際通りはどうでもいいよ。店が沢山あるところでしょ。買い物しないし、興味ないね」

「夕方、伯父さん夫婦が一緒に夕食しに来るんだって。伯父さんは母の兄さんなの。息子が一人いるけど名古屋だから年に一、二回しか沖縄には帰ってこないって言ってました。私が友達連れて来るって言ったら、賑やかになっていいって。沖縄の人って人が来るの大好きなんです。多いほど喜びますね」

飛行機が着陸態勢に入ると、窓から一面に青く広がる海が見えた。

おばあの家には伯父さん夫婦も来ていて大歓迎してくれた。三月、マリアは日本へ来た時、二週間ほどおばあの家で過ごしていた。伯父さんも「大きくなったねー」と言って喜んでくれていた。それから四カ月しか経っていないのに、伯父さんは「大人びたねー」と言った。

伯母さんが「彼、ハンサムね。ボーイフレンド？」と聞いた。「ボーイフレンドじゃないよ。ただのクラスメイト」と言うと、「ほんとに？」とか言って笑っていた。おばあも「あんた、その人と結婚するのね？」と言った。大人はすぐにそういうふうに思うんだ。そこがペルーと日本の違うところなんだ、とマリアは思った。

大好きなおばあ手作りの、ソーキそばが出た。伯母さんも美味しい沖縄てんぷらやサーターアンダーギーをテーブルの上に沢山並べて、みみんがーの酢物までも。ビールの缶を開けて、沖縄の家庭料理で夕食が始まった。

「ソーキそば、旨いですね。初めてです。豚肉、柔らかくて美味しい。福岡で食べる豚肉よりずっと美味しい」

「沖縄の豚肉は特別美味しいんです。日本では有名なんです」

劉さんは、美味しい、美味しいと言って、沢山食べていた。豚の耳も久しぶりだと言って喜んでいた。伯父さんが「本土の人、耳は食べませんからね。売ってないでしょう」。伯父さんはビールもどんどん勧めるから、劉さんはちょっと迷惑ぎみだった。

賑やかな夕食を終えて、伯父さん夫婦は帰って行った。

翌日、おばあの車を借りてドライブすることに。遠くまでドライブするのもいいけど、沖縄の海は特別美しい、海で泳いだり遊んだりする時間を少しでも多く取りたい。だからなるべく近くの海の方がいいと、劉さんは言う。マリアも同じ考えだったから近くの海岸に行くことにした。

広い海岸にはもう既に多くの人がいて、ビーチに寝転んだり泳いだりサーフィンをしたりと楽しんでいた。ホテルの前は特別に混んでいた。二人は人が少ないところを選んで、ビーチの外れの方に歩いて行った。

「サーフィンおもしろそうね」と劉さんが言う。

「岩場のところで海の中を覗くと、魚や貝、海草も生えていてとってもきれいよ。別世界みたいよ」と言うと、じゃ、そこへ行こうと彼は言って、岩場を目指して走った。

「その代わりロッカー室ないよ。脱いだ服は岩の上に置きましょう。水着、着て来てよかったね」

服を岩の上に置いて、走って海の中へ飛び込んで行った。

「水が透明で底まで見える。気持ちいい」と言いながら、劉さんは両手で水をマリアに掛ける。マリアも負けずに水をどんどん掛けた。

追っかけてふざけていると、彼がマリアの足を両手ですくい上げ、「お姫様抱っこ」と言った。マリアは「キャー」と声を上げ、両手を彼の首に回して体を安定させた。彼がほっぺにキスして、「すごくロマンチックな気分」と言いながら、海の中を歩いてビーチの方へ行った。マリアはずっとこのまま抱かれていたかった。

シートの上に腰を下ろして並んで座ると、「ごめんね」と劉さん。「いや、私うれしかったよ。もっとずっと抱いていて欲しかった」と言って彼の顔を見た。彼はバツの悪そうな顔をして笑った。

「泳ぐの少し疲れたから、岩場のところに行って、海の中、見てみない？　貝や魚が捕れるかもよ」

沢山の小魚たちが泳いでいる。手で掬うと簡単に捕れる。赤や青の縞模様や丸い模様など、美し過ぎる。

「沖縄の魚って熱帯魚が多くて食べられる魚は少ないの。きれいだから見て楽しむんです。私、巻き貝捕りました。食べられるかどうか、おばあに聞いてみないと」

遊びに夢中になって時間を忘れてしまっていた。時計を見ると三時をとっくに過ぎている。お弁当も食べてなかった。楽しいことをしていると時間はあっと言う間に過ぎてしまう。

シートに座って持って来ていたお弁当を広げ、おにぎりをほおばった。お腹空いてるから美味しいね、と言いなが

ら、持って来ていたおにぎり、あっと言う間に食べてしまった。

「シャワーして帰りましょう」と彼が言った。まだ帰りたくない気分だったけど、片手で服を纏めて持ち、歩いて行った。広いビーチではまだまだ沢山の人たちが遊んでいる。

「明日あんまり時間ないけど、少しだけでもサーフィンしたい」と彼が言った。

帰り着くと、「車の掃除したいからおばあちゃんにバケツと雑巾、借りて欲しい」と言った。「おばあちゃんには沢山お世話になっているから」と言う。おばあは喜ぶだろう。

掃除が終わった時、おばあが出て来て、「まあ、きれいになって！　中も外もピカピカになったね。掃除あんまりしないもんだから。仕事が丁寧だね」と言って喜んでいた。

「明日も少しですけど、ガラス窓拭きや網戸掃除させてもらいます。一宿一飯のお礼です」

「お礼してくれるって、中国人は礼儀正しいね」

「全くの他人にこんなに良くしてくれて。お礼に何かしないではおれませんよ」

「若い人は元気がいいから。年を取るとガラス拭きや網戸掃除大変だからありがたいよ」

「保証人さんの家のガラス拭きとかその他の掃除、いつもさせてもらっているんで慣れてます」

「ありがとう、助かるね」

二人が話している間にマリアは夕食の支度をした。料理、沢山は知らないので、カレーと野菜サラダを作った。

「カレーのいい匂いがする。美味しそうだ」と言いながら、劉さんが上がって来た。おばあと三人、楽しい夕食。劉さんは沖縄の海の美しさをしきりに話していた。いつも独りでご飯食べてるおばあはとても嬉しそうに話を聞いていた。

夜は涼しい風が入って来る。網戸だけで寝るので、劉さんは驚いていた。

劉さんは、最終便で帰るからもう一度海へ行けると言って、午前中ガラス拭きや網戸掃除に精を出していた。マリアも台所やお風呂の掃除をしてピカピカに磨き上げた。おばあは「若い者は早くてきれいにしてしまうね」と喜んでくれた。

時間いっぱいサーフィンをして、マリアは最終便に劉さんを空港まで送って行った。

福岡に帰ったらまた会えるね、と言って堅く手を握りあって別れた。マリアは夏休みの間、沖縄で過ごすことにしていた。